

令和6年度 富山大学大学院人文社会芸術総合研究科
人文社会芸術総合専攻（修士課程）人文・芸術プログラム 芸術文化学系
一般入試・社会人入試・外国人留学生入試
入学試験問題

小論文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この試験問題を開いてはいけません。
2. 問題用紙（本文）は4枚、解答用紙は1枚、下書用紙は1枚あります。問題用紙および解答用紙に不備があった場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
3. 解答は、すべて解答用紙に記入してください。
4. 受験番号は、解答用紙の指定欄に算用数字で記入してください。
5. 試験終了後、問題用紙および下書用紙は、持ち帰ってください。

次の文章は、フランスの美術史家アンリ・フォション（一八八一―一九四三年）が記した「手を讃えて」の一部である。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私はこの手の礼讃を、友人としての務めを果たすような調子で書いていくつもりである。これを書き始めようというこのとき、私は自分自身の手を見ている。それは私の精神を奮い立たせ、導く手である。かくも長年のあいだ仕事をこなしてくれた、この疲れを知らぬ伴侶、いまその一方は紙の上に置かれており、他方はこの白い紙片に、黒々と詰め込まれて躍っている小さな記号の数を増やしつつある。手を通して、人は思索の堅固さに触れるのである。手はひとつの塊を探り出す。手はその塊にかたちを与え、輪郭をもたらし、書くときでさえ、ひとつの様式を課するのである。

手は、生命を持った存在と言ってもよい。いや、従者に過ぎないか？ そうかもしれない。だがそれは自由で活力ある精霊が宿り、顔を備えた従者である――その顔とは、目もなく口もきかないが、見て語る顔である。或る種の盲人は、長い間に、きわめて薄い印刷の厚さによってトランプのカードを区別するほどの精妙な触覚を獲得する。だが目の見える者たちもまた、見るために手を必要とし、触れまたつかむことによって外観の知覚を補うために手を必要とする。手は、その曲線、その形状に彫り込まれた特質を持っている。分析に長けた精妙な手、論客の、長くよく動く指、靈気を帯びた予言者の手、精神的な手、それは動かない時でさえ優雅で個性的である。そして優しい手。かつて支配者たちによって熱心に実践された観相学は、手についての一章を備えていればいっそう深いものだっただろう。人間の顔は、まずは受容器官からなっている。手とは能動である。つまりそれはつかみ、作り、ときとして考えとも言ってもよいだろう。休むとき、それはテーブルに投げ出された、または体の脇にぶら下がった生なき道具ではない。習熟、本能、そして行動への意志が手においてじっと思いを巡らせているし、手がなそうとしている動作を見破るのに、みっちり訓練を積む必要はないのである。

（中略）

手のこの特権はいかなるものなのだろうか。このもの言わぬ、視覚なき器官はなぜ、かくも説得力をもってわれわれに語りかけるのだろうか。それはこの器官が、生命の高次の形態にも似てもっとも独創的で、もっとも分化の進んだもののひとつだからである。精巧なちようばん蝶番じんたい関節で連結された手首は、多数の小さな骨によって組み立てられている。五つに分岐した骨と、一連の神経やじんたい靱帯は、皮膚の下を通過して五本の別々の指として勢いよく姿を現し、三つの関節を持つおのおのの指は、独自の性格と精神とを持っている。静脈と動脈が走り、縁は丸みを帯び、手首と指をつないでいる厚い手の甲は、その指の秘められた構造を覆い隠しているのである。その裏側、てのひら掌は、かたく花托である。手は活発に活動する中で、柔軟にも堅固にもなることができ、同様に物のかたちにぴたり寄り添うこともできる。こうした活動は掌に印を残し、過去や未来を知る手相ではないにしろ、それらの印を痕跡として、またさもなくば消し去られてしまうわれわれの生の記憶として、おそらくはまたいつそうはる遙かなる遺産として読み取ることができる。近くから見ると、それは奇妙な風景をなし、山々と中央の大きな凹みがあり、狭い溪谷がある。それらは一方で挿入節や鎖状線、組み合わせ文様で亀裂が入り、また他方、書体のごとくに純粹精妙である。ここにありとあらゆる画像を思い浮かべることができる。この画像に問いかける人が、謎を解く見込みがあるのかどうか、それは分からない。だが彼がこの素晴らしい従者に敬意をもって見入るのは良いことだと思う。

(中略)

ところで手はまた、数を秩序立てるものでもある。ということとはつまり、数そのものでもあり、また数を数え拍を刻む器官でもある。それ以上に手は、宇宙に触れ、それを感じ、手中にし、変容させる。手は、物質がこうむる驚くべき変化を組織立てるのである。手に取って、存在するものを取り上げるだけでは十分ではない。手は存在しないものに働きかけ、自然の秩序に新たな秩序を加えねばならないのである。住居や神殿の屋根を持ち上げるのに、手は永らく、磨きもせず樹皮の装いもそのままの丸太を建てることで満足していた。死者を悼み、神々を讃えるために、手は磨きもしない石を積み上げ、また立ててきた。部材の単調さを飾り立てるために樹液を用いることによって、手はいつそう大地の恵みに敬意を払っていた

のである。だが、手が木材の凹凸だらけの外皮を剥がして芯をむき出しにし、その表面を傷もなく滑らかになるまで仕上げたその日から、手は見ても触れても快い一枚の表皮を創出したのであり、また木の幹の奥深くに隠されるはずだった木目は、謎めいた文様を明るみに出すことになったのである。山塊の奥底に蔵された、まだ明確なかたちをとる前の大理石の塊は、方形や板状に、あるいは人間のかたちに切り出されたとき、その本質と内実とを変化させたように見える。それはあたかも、石が受け取ったかたちが、その存在の光なき内奥、その素粒子にまで作用したかのようである。同様に鉱石は、脈石〔鉱石とともに出土する無価値な鉱物〕から引き離され、互いに結びつき、合金として溶け合い、そうして金属の列に新たな合成物を付け加えるのである。また火で焼き固められ、七宝の輝きを放つ陶土、そしてさらさらと流れ、かたちを持たない粒子でありながら、火によつて固く透明な物質、つまりガラスが抽出される砂についても同様である。藝術は、物質的な変化に始まり、かたちの変化によつて継続される。つまり藝術とは、神に語りかける人間の語彙ではなく、むしろ天地創造の際限ない更新なのである。藝術とはかたちの創造であると同時に、物質の創造でもある。それは、自らのための物理学と鉱物学とを打ち立てる。藝術は、自らに喜びを与えるような形姿をもたらすために、その手を事物の奥底にまで沈める。藝術とは何より、職人であり錬金術師なのである。藝術は鍛冶師のように、皮の前掛けをして労働にいそむ。藝術は重く熱いものを相手に格闘するので、真っ黒で傷だらけの手をしている。そうした力強い手が、荒々しさ、巧みな工夫といった点で、人間に先駆けているのである。

木を切り、金属を打ち、土を捏ね、石塊を削る藝術家は、人類の過去を、つまりそれなくしては今日のわれわれも存在しない、古代人たることを受け継いでいるのである。この機械時代に生きるわれわれのただ中に、手に生きた時代の疲れを知らぬ生き残りがすくと立っているのを見るのは、なんと素晴らしいことだろう。幾多の時代が彼の上を通り過ぎたが、その奥深い生を変えることはなかったし、世界を発見し創造する古代からの方法を諦めさせることもなかった。彼にとって自然は常に、秘密と驚異の貯蔵庫なのである。そうした秘密を彼が自分自身の活動に繰り込ませようと、それらを明るみに

出すとき、彼が用いるのはいつも、素手という頼りない道具に過ぎない。かくして、あの恐るべき過去が再開される。つまり火と斧、車輪、轆轤の発見が、ただ繰り返されるのではなく、もう一度なされるのである。ある藝術家のアトリエには、手による企て、実験、予見が至るところに書き込まれており、手を用いるという特権を忘れなかったこの人種の幾世紀にもわたる記憶が刻まれている。

(中略)

ネルヴァル〔一八〇八―五五年〕は、呪いをかけられて胴体から離れ、世界をさまよって不思議な事件を起こす手の物語を書いている。私は手を身体からも精神からも切り離さない。だが手と精神との関係は、いつもかしくかれています。主と忠実な召使いといった間柄ほど単純ではない。精神が手を作り、手が精神を作る。創造しない、明日なき身ぶりは、意識の状態を活性化し、また決定する。一方、創造する手は、内的な生命に継続的な作用を及ぼす。手は触覚を受動的なあり方から引き離し、それを経験と行動に向けて組織立てる。手は人間に広がりや重み、密度、数を把握することを教える。新たな宇宙を創造しつつ、手はその中の至るところに自らの刻印を残す。手は、自分が変容させつつある素材と競い合い、変貌させつつあるかたちと拮抗する。手は人間を教え導き、空間と時間の中に遍在させるのである。

出典…アンリ・フォション著、阿部成樹訳、『かたちの生命』、筑摩書房、二〇〇四年

ただし、漢字や表記などを一部改めている。

問 この文章を踏まえて、創造行為における手の役割、手と精神の関係について、あなたの考えを、あなたの専門分野と

関係する具体例をあげて、八〇〇字程度で述べなさい。